

産業構造審議会 産業技術環境分科会 研究開発・イノベーション小委員会

評価ワーキンググループ（第54回）

議事録

日時：令和2年7月17日（金曜日）9時00分～12時00分

場所：経済産業省別館6階628会議室

議題

1. 令和3年度新規研究開発事業に係る事前評価について（審議）＜議事録非公開＞
2. 令和2年度中間・終了時技術評価実施計画について（報告）
3. その他

出席委員

森座長、秋澤委員、亀井委員、斉藤委員、鈴木委員、竹山委員、西尾委員、浜田委員

議事内容

○大本技術評価室長

ただいまから産業構造審議会第54回評価ワーキングを開催いたします。

本日はお忙しいところ、またお天気がよくない中、ご出席いただきまして、ありがとうございました。

早速でございますけれども、森座長に議事進行をよろしくお願いいたします。

○森座長

皆さん、おはようございます。朝ということ、雨、コロナもおさまっていない中ですが、よろしくお願いいたします。

それでは、審議に入ります前に、まず事務局から配付資料の確認をお願いいたします。

○大本技術評価室長

それでは、資料の確認ということで、ペーパーレスで行わせていただいております。タブレットの中に資料1から資料7、また補足資料1から5まであるかと思います。何かご不明な点等ありましたら、事務局までご連絡いただければと思います。よろしくお願いいたします。

○森座長

ありがとうございました。

それでは、本日はすけれども、事前評価5件の審議を予定しております。事前評価の審議の場合には、公表前ということで、本日の審議は非公開となります。また配付資料につきましても、当面は非公開といたしまして、後日、支障のないものについて公開するとい

う形になりますので、その点、ご注意とご了承をお願いいたします。

【議題 1 は非公開】

続きまして議題 2 「令和 2 年度中間・終了時技術評価実施計画について」、事務局からご説明をお願いします。

○大本技術評価室長

資料 7 をご覧いただければと思います。今年度の技術評価の実施計画ということで、1. の評価対象件数でございますけれども、一番上の研究プログラムの評価、これは 1－1 で複数課題のプログラム評価の中間評価が 1 件、1－2 の制度評価の中間評価が 1 件。あと研究開発課題のプロジェクト評価が、中間 1 件の終了時 3 件、計 6 件、行わせていただく予定でございます。

2. の下の方でございますけれども、No. 1 から No. 4 まで下線が引いてあるのですが、既に先月の評価ワーキングで審議済みでして、残るは No. 5 と No. 6 のサポインと M a a S の事業を今年の 12 月から 3 月にかけて審議していただくスケジュールになってございます。

以上でございます。

○森座長

これは今後の計画でございます。

では、以上をもちまして、本日の評価ワーキングは終了でございます。では、事務局のほうに……。

○大本技術評価室長

事務局から最後、報告がございます。森座長でございますけれども、本当に残念でございますが、今回が任期の関係で最後の評価ワーキングとなります。前身の評価小委員会の時代から 10 年にわたり、技術評価にご尽力いただきまして、本当にありがとうございました。事務局より厚く御礼申し上げます。

今回の評価ワーキングは 28 日を予定しておりますけれども、後任の座長は実は互選ということもあるのですが、森座長とも相談させていただいて、鈴木委員はいかがでしょうか。実は鈴木委員も既に 10 年やって、今、第 2 期目に入ったところでございますが、皆さん、よろしゅうございますでしょうか。（各委員から特段の異議なし）——では、そういうことで、鈴木委員にお願いできればと思います。

それでは、新旧座長に一言ずつご挨拶いただければと思います。最初に森座長からよろしくをお願いします。

○森座長

森でございます。座長を 2 年間務めさせていただきまして、その前、平澤先生、渡部先生、小林先生と、ずっと続いてまいりました。大変に重要な委員会だったと思います。大変におもしろいといったら変ですが、努めさせていただきました。座長の進行としては、

いつも時間が押せ押せになってしまっていて申しわけございませんでしたが、どうも、厚く御礼申し上げます。皆さん、ありがとうございました。

○大本技術評価室長

続きまして、鈴木次期新座長からお願いします。

○鈴木委員

ご案内いただいたように、2巡目というか、長いのですけれども、今までは発散させるようなことばかり言ってきて、ちょっと反省するところもあって、座長を仰せつかる、ちょっとまとめるような方向にもっていかなければいけないというように考えております。

このワーキンググループも、原則、内容とか公開されますので、外から見られても恥じないような評価をやっていきたいと考えております。よろしくお願いいたします。

○大本技術評価室長

ありがとうございました。

最後に、経済産業省大臣官房審議官の渡邊から一言、ご挨拶いたします。

○渡邊大臣官房審議官

渡邊でございます。本日は5つの議題についてご審議いただきまして、ありがとうございました。

また森座長、10年間、本当にお疲れさまでございました。ありがとうございました。また鈴木先生にはこれから新座長として、ぜひよろしくお願いいたしますと思います。

以前もご紹介申し上げましたけれども、科学技術基本計画は来年から次の5か年に入りますが、法律の改正がうまくいきまして、いよいよ科学技術・イノベーション基本計画というように名前が変わります。この「・イノベーション」が加わる意味というのは非常に大きくて、経産省も、そこにしっかり提案していくことが重要だと思っています。

その過程で、私は一つの事実に気づきました。実は、この「・イノベーション」を加えることについて、誰も反対する人はいないであろうと思っていたら、結構な反対がございまして、結局、世の中の基礎研究をやっている先生方は、「・イノベーション」とか、経産省が頑張れば頑張るほど文科省のお金が減るのではないかと、大学のお金が減るのではないかと。つまり、基礎研究とイノベーションの政策がややトレードオフ関係、要するにゼロサムゲームなのです。役所はどうせ予算が増えないから、ゼロサムなのではないかと。経産省はあまり頑張らないでほしいとか、そのような意見を目の当たりにしまして、世の中いろいろなことがあるのだなと思ったのですけれども、決してそんなことはなくて、我々としては、当然基礎研究も頑張っていかなければいけないし、イノベーションも頑張らなければいけないということで、そこはトレードオフではないです。両方増やしていきたいと思っているわけです。

基礎研究につきましては、特に若手の研究者、今、理系の学生が減っていくというのは問題なわけでありまして、若手の研究者に対する支援というのをぜひ拡充していきたいと思っていまして、これは文科省任せではなくて、我々も予算を投じていきたいと思ってい

るところでございます。

そんな中で、研究開発のお金の出し方というのは、昭和から変わっていないのです。要するに、国の予算で交付金がNEDOに行って、補助金か委託費で民間に行く。せいぜい補助率が3分の2とか2分の1で民間負担みたいなものがありますけれども、基本的には、国の補助金でやるというのは変わっていないのです。企業に負担していただいているといっても、それはもともと企業が負担していたところに、国がちょっと助けただけではないかとか、企業としてはラッキーみたいなものもあるのではないかと思います、それは結局、昭和から変わっていない。そういう中で、もう少し何か、エクイティ的なお金なのか、ファイナンス的なお金なのか、プロジェクトファイナンス的なものなのか、考えてみたらいいのではないかと思います。

例えば、研究開発をやる人が2分の1、国のお金をもらってやるのではなくて、研究開発をやらない人が2分の1負担するというのがあるのもいいのではないかと。そのかわり、成果物はお金を出した人も見ることができるとか、共有することができるとか、ネーミングライツが与えられるとか、そういうのがあっていいのではないかと。あるいは、これから研究して出てくるデータには価値があるわけですから、データを担保にお金を借りたり、投資したりということができないかとか、そういう新しい研究開発プロジェクトのお金の集め方ですとか、あるいは、これは本当に私の個人的な意見ですが、研究費を増やしていないような企業に補助金を出すというのはどうなのだろうと。むしろ研究費を増やしているような会社しかプロジェクトに参加させないとか、そういうことをやってもいいのではないかと。これは逆に言うと、強者ばかり助けて、弱者はみたいな話があるかもしれない。でも、そういうことも研究して、研究費というのは、研究をするためだけに使うのではなくて、民間の研究費を増やすインセンティブとしても使うとか、そういうこともタブーなしで検討していったらいいと思います。こちらでは、そういう制度についても今後、ご評価をいただくことになるわけですが、我々も新しい時代の研究開発プロジェクトのあり方というのをぜひ考えていきたいと思っています。

ただ、私は、実は端で見ていてちょっと感じていたのは、コロナは、結局イノベーションで克服するしかないのです。そのイノベーションというのが、比較的医学的、薬学的なイノベーションを中心に語られることが多いのですが、私はそれ以外にも何かイノベーションがあるような気がして、そこを少し追求してみたいと、個人的には考えているところでございます。今までの知見をぜひ生かして、やっていきたいと思っています。

本当に森先生、長い間、ありがとうございました。また鈴木先生、これからよろしくお願ひします。できれば最後、拍手で先生を送りたいと思います（拍手）。

○森座長

それでは、これをもちまして散会とさせていただきます。どうもありがとうございました。

—了—

お問合せ先

産業技術環境局 研究開発課 技術評価室

電話：03-3501-0681

FAX：03-3501-7920